私の保育

―幼稚園の今昔―

本多育枝

幼稚園の先生……「あーやさしい方ね。子どものめんどうみがいい方ね。子どもが好きでなければ…」とよく耳にするが、私もその通り子どもが大好きということで、二十年前にこの道をえらんだ。わが家に「こどもの園」をの夢をいだいて進んではみたが、当時の現実はきびしく、とうとう実現できなかった。

この情熱をどこへもっていこうかと考えた時、誰も希望しない先生不足のところへ出向いてゆき、子どもと共に生活してみたいと思い、親元をはなれ、単身、東京下町の出来たばかりのバラック幼稚園に勤務した。子どもたちは、せまいへやにひしめきあって、エネルギーの発散の場もなく、ある子どもはピアノの上にのったり、窓からとびおりたりの大はしゃぎなので、新卒の私は、いささか面くらってしまった。しかし日が立つにつれて、やりがいのあるところだと思い、やってみようという意欲が心の底からわいてきた。

二年間とうとう口をきかなかったTちゃん。たべものや友だちの好き嫌いがはげしかったIちゃん。何事も消極的で存在がはっきりしないSちゃん。おっとりかまえすぎるくらいのYちゃんなど、子どもたちは、それぞれの持ち味をそのままにして修了して行った。

この間の私の失敗は山ほどあったが、今になってみると一番

なつかしく数々のおもいでがよみがえってくる。その子どもたちから、十六年ぶりに電話がかかってきた。

「これから四人でお邪魔したいと思いますがよろしいでしょうか」びっくり仰天、うれしいやらおどろくやらで胸がドキドキした。

「先生ぼくたちの顔を覚えていますか。ぼくたちは先生の顔は写真をみてきましたから、よくわかります」とのことだった。

四歳の時、五歳の時の顔、そして話しぶりやしぐさなど、あれこれ想像しながら思わずひとりニコニコしながら駅にむかった。あんのじょう子どもたちの方から私をみつけかけよってきた。感激してことばも出なかった。特に背の低い私は、すっかり成長した姿の子どもたちを見上げるようにしながら四人のなかにはいって、しばし無言だった。

初めて幼稚園に勤務した四年間は、ただただ夢中で、ガムシャラに動きまわったが、とうとう自分の能力の限界をかんじ、スランプにおちいり、いろいろと考えた結果家庭にはいろうか、また、別の道を勉強しようかとも考え退職することにした。幼稚園教育の必要性が全くわからなくなってしまい、考える時間、勉強する時間がほしかった。しかし子どもたちから離れ机上で考えることは、いずれも空理空論に思えたので、おもいきって専門外の仕事を手がけてみた。そこで得たものは、何よりも「心と心のふれあい、人と人との出会いの大切なこと」「人間の能力には限界がない」という数々のことを学んだ。

限界ができるのは、限界があると思った時である。現在の私たちは、あまりにも「努力」と「実行」という点が、かけているのではないだろうか。

四人の子どもたちは「先生は、まだ幼稚園の先生をしているのですか」「どうして？」「こんなチビ教えていたって無駄ですよ。何もわからないですからねえ―」「教師との出会いの大切な時は、高校時代だと思うけれど」「ぼくが、こんなに話をするようになったのも高校の教師との出会いからだったなあ―」「うん、ぼくも高校のクラブ活動で積極的になった」「Iちゃんは好き嫌いが多かったけれどその後どう？」「全然ありませんよ」きくところによると、友だち関係も実に豊かであること。おっとり型のYちゃんは、昔の面影はなく、やたらに理屈をこねまわしていた。私は思わず「うーん」とうなってしまった。「そうそう、おふくろが、よろしく言っていました」「先生うちのおふくろがね、〝お前の幼稚園の時はムッツリダンマリで、ずいぶん先生を困らせたんだよ〟というから、〝よーし、いまからでもおそくはない。先生にあって、思う存分しゃべってこよう〟と思い、無

性にあいたくなったのです」

「私も母からきかされることは、たいてい幼稚園時代のことなのです。ずいぶん、わがままだったとか……また泣き虫で、先生にだかれ、こぎましょ、こぎましょ、ブランコを、Iちゃんの、おうちが、みえるまで……とブランコにのったことを、よく覚えています」「ぼくたちが作ったおとし穴に、何回もおちてくれたことが、印象に残っています」「いつも笑っていたし、歌っていましたね。だけど先生は、こわかったなあ—」「家へかえりたいと泣く子がいた時、先生もいっしょに泣いていましたよ」私自身泣き虫なので、泣く子どもの気持ちは胸が痛くなるほどわかった。

当時の四歳児と二十歳の私が昔話に花を咲かせている現在が、ふしぎでならなかったが、こんな私の姿が幼児の目にとまり、いまは、おもいでとなり、語りあう時、やはり幼稚園の先生との出会いも有意義であることが、かんじられうれしく思った。

そのころの私は、ガムシャラに動きまわったこと、子どもといっしょに遊びまわったこと、降園後は地域の中にはいって、おかあさん方と、世間話をしたり、子どもたちの遊具をいっしょに作ったり、思わず知らず時計がまわって暗くなった荒川の土手を夢中で走りかえったことなどが次々と思い出された。

「先生、今に世界の〇〇会社(現在は家内工業)になって、社会科の教科書にのるようになるかもしれませんよ。たのしみに待っていてください」この夜はすっかり興奮してねつかれなかった。

それぞれに味のついた子どもたちの姿を目にうかべながら、現在の幼稚園の子どもたちはどうであろうかと考えてみた。先生がだっこして、のんびりブランコにのれるかしら? 幼い時から、好むと好まざるとにかかわらず、複雑な味つけをされ、その上「Aちゃんは〇〇です」とレッテルをはらなければ教育効果うんぬん……ねらい達成うんぬん……と逆評価される。レッテルは、誰にもはってはならぬもの、またはれぬものではないだろうか。私は少なからず反発をかんじる。

人はそれぞれに自分にあった味を、ある時は自らつけながら……またある時は人との出会いによって、相手の味もあじわいながら、自分の味に加え成長して行くものではないだろうか。是非そうであってほしいと、しみじみ思うこのごろである。

今と昔の幼稚園の先生評とは「やさしい、めんどうみがいい、子ども好き」が今は、ややもすれば親同様過保護の感がないでもない。ということは、教師自身が周囲の干渉に気をつかって、おくびょうになっているのではないだろうか。昔いわれた、ほ

んとうの「やさしさ、めんどうみがよい、子ども好き」とは「心にかけて手にかけすぎるな」という意味である。

現在私のなげいていることは山ほどあるが、机上でうんぬんするより教師自身が実行することだと思う。

まず第一にことばの洪水におしながされないよう行動力を養い、言行の不一致がないよう自分の意志をはっきり表現し人につたえることができることを、しっかり身につけたいとねがっている。

第二に、子どもが最初に出会うのは両親、そして家庭の人々、それから私たち教師であるが、教師の立場からみれば、子どもと出会う前に先生同志の出会いから教育が始まるのではないだろうか。この出会いこそ大切な第一歩であるが、なかなかむずかしい問題がある。教師は常に研究を要求され、また共通理解をもってといわれるが「研究、研究」と何をしようとしているのか。あまりにも子どもを、いじくりまわし、結局は子ども不在の研究結果にならないだろうか。実際に子どもの心や、からだにふれることの方が何よりも大切なことである。

「幼児教育は育児書のようなわけにはいかない。白紙の一ページ一ページにかきこんで行く仕事である」といわれた周郷先生の話を思い出した。

現在の幼稚園は形態にとらわれて、足もとがぐらつき自信をなくしているかんじがしないでもない。その時々に応じて子どもが集中できる形態のなかで、お互いに自然な姿でふれあっていくならば、もっともっと、いきいきとした子どもの姿をみることが、できるであろう。

この姿の中にこそ、得るもの教えられるものがたくさんある。

「元気、根気、勇気」である。どうかこの三本の木が過保護によって阻止されないようにすくすくと育ってほしいものである。

（三鷹市立こじか幼稚園）